

## 稿本あゆひ抄における半語の位置

佐田, 智明

<https://doi.org/10.15017/12290>

---

出版情報 : 語文研究. 16, pp.44-50, 1963-06-30. 九州大学国語国文学会  
バージョン :  
権利関係 :

# 稿本あゆみ抄における半語の位置

佐田智明

富士谷成章のあゆみ抄が種々の点で卓抜であることは今さら云うまでもないが、その学問の体系が、どのようにして形成されてきたかについては、充分明らかでないように思われる。近年出版された竹岡正夫氏著富士谷成章全集上・下は、成章に関する資料を尽し、多大の卓見にあふれた内容であり、種々教えられる点が多い。本稿では氏の御研究に恩恵を受けながら、稿本あゆみ抄に見える半語を手がかりとし、成章の学説の発展の状況をうかがって見たいと思う。

既に紹介されているように、稿本あゆみ抄には、後の刊本に見られない術語があり、全語半語というのもその一つである。稿本裏表紙見返には

半語全語 三具ノ内ノ別也、名ハ皆全語也

とあって、右から三具の内にそれぞれ全語半語があると考えたことが知られる。半語という語はかざし抄には見えず、稿本前半にのみ表われ、成章の言語研究の一時期に存したものと見られる。

さて、いかなるものを全語とし、半語としたか、まず用例を列挙したい。引用中△▽は筆者の説明、( ) は原文で抹消してあるもの。『』は同じく補入してあるものを示す。

一、動詞の連用形に相当するもの△成章のいう往きしかた、稿本前半ではエケ(下二段)、イキ(四段、上二、上二段活用等)で表わされる▽

1何や何 やのうちあひの図 イキ入りウチナト半語也ーや何(10ウ)註<sup>1</sup>

2何も何かな 上の何は名又はさまメツ又いきえけつめ これは半語をわり入る也。(16オ)△後述▽

3何も何かな うちあひの図  
半語ツケイキーも何かな(16ウ)

4何を何キ 上の何はかきし又(半語のいきえけ)事のうくつめ又ハ名又ハあゆみをうけたり(20ウ)

5何を何し 上の何ハ名又ハ事のうくつめ又かきし又半語也、下の何ハ事のいきえけつめ也、二例也、下の何は事のいきえけつめ也

(中略)二例事うくつめあゆひかきし 半語をうけたるは例の上へまはしてコチャ何ニモセヨ 何かシラスと尺すへし(22ウ)

6かきね詞の何にこそ何 上の何は半語のいきえけ也(21オ)

7 何こそ何 上の何は名又は(事の)半語のいきえけ、又ハきまうく  
いき又ハかさしあゆひさままにうけたり(21ウ)

8 そ・こそうちあひのかた

半語 イキエケツメーそ何 (22ウ)

こそ何

9 何もや何

(4) (上の何は前に同じ、下の何は疑詞のやのうちをみて心得へし、但何もや疑にはうくへからず) 『但名と半語のいきえけつめを受たる時世』(ハ中略)上の何、名又は半語のいきえけつめ等を受たる時は里に何トモ何カといふ(26オ)

(5) 上の何は前に同じ、下の何は疑詞のやのうけに同じ心得也、但何もや疑とはうくへからず、詞の心しかり、又上に半語をうけたる時は下の何は事のうくつめ又は(あゆひ)やをうくへきあゆひのみにてさまの(い)きつめとはうくへからず、是又詞の心しかり、ハ中略(里言)にもは其まゝにてやは疑詞の例のことくカになして心うる也(又上に半語)又何トモ何カ 何ナトモ何カと里しても心えやすきもあり(26オウ)

ハ何もや何の前条何もで接続は何は名三具、半語のあかつめ以外すべて受くとしてゐる。同一箇所を刊本では、「何は名頭脚引麗往等也、末をうくるは咏属に出す(何も、二ノ十三ウ)とあつて(名脚往等をうけてはドモ・ナドモなどいふ)と述べてゐる。該当証歌の一ツに  
かれも。やすと。  
ハ結(ナドモ)カカ

とある。故にこの半語は往に相当すると考えてよい。V

10 何と 三例 重詞のとといふ。何と何(又何とも何とよむも同し)上下ともに事にて上の何は半語のいきえけ也(34ウ)

二、動詞の未然形に相当するもの(ハ刊本の来、稿本ではアカ(四段)エケ(下二・サ変)イキ(上一・上二段)オコ(カ変)で示されている)

1 何はや (4)何は事「の半語」にてあかえけおこつめ也(17ウ)

(5)又者也 咏下者類等に在、半語ヲ受ト不受トニテ全同詞也(同

頭注)

ハ(何は「あづまはや」と「行かはや」の区別で後者は(4)に当る)

2 何も 何は名三具みなうけたり。半語のあかつめをうけぬのみなり(26オ)

3 は類はしかき(後に補入したものか)

半語をうくれはにこり、全語をうくれはすむ也(25オ)

ハ(大蔵の書入に「半語ヲウクレハ濁入打ナトノ来也、「又目」、全語ヲウクレハ清 入打ナトノ往也」とある。)

4 何て 半語をうけたるは不の心にてにこる也(28オ)

三、動詞の已然形に相当するもの

1 ハ二項例3参照

四、形容詞語幹をさしているもの、その他

1 何や(今)ひとは上にさまをうけたり、いきになひきたるもあり、又なひかすして半語にうけたるもあり、『又さまをいてのをへたて、物をうけたるもあり』なひきは里にイコトヤノ(半語)は里ヤノとあつへし(14ウ)

ハ証歌を見ると、ク活終止形と語幹の例があり、語幹の例は、めづらしや、あぢきなや、はかなの道やが見える。従つてイキになび

くは語尾にシを附したものをさし、半語はシがつかないものをいっている。刊本でいう状本は半語であり、イキになびくは刊本の末にあたる。参考までに刊本を引用すると刊本では味のや、状のやは次のように整理された。(一ノ五ウ)

- 一、し状の末をうく……うしや・つらしやー里コトヤノ
- 二、し状の本、鋪の末をうく……はかなや　こひしやー里ヤノ
- 三、芝の本　鋪の末にのもしをへだてゝ名をうけたり……おもし  
るのよやー里ヤノ

其の他状のうちで半語かと思られるものに、「何そ何し」(一の例5)がある。刊本と対照すると、「しるぞぞ有ける」(曾家、二ノ五ウ)の如きもので、状の往である。しかし稿本に状往を半語と明示している例は見えない。なお、「何も何かな」(一の例2)で、接続を記した所は「名又はさまメ」又いきえけつめ」とあるから半語かと思われそうであるが、次の例3の所にもあるように、「も」の上の何は、「名、さまツメ、半語ツメ」ことくコト、に(以下あゆひの例あり、略)となっており、半語ツメとさまツメとは区別せられたと見る外なく、直ちにさまツメを半語としたと決めるわけにはゆかない。

## 二

以上の用例でまず知られることは、半語が稿本36丁までの、装の名目が完成していなかった頃の術語であつて、主として装事の往目来に当る活用形を示す場合に現われていることである。竹岡氏は半語について次のように説明された。

「例えば木枝増一氏が動詞についてであるが『活用形がそれだけ

で単独にある意味を表わすもの、即ち、他の単語に連続することなしにそれだけで動詞としての職能を果し得る『単独用法』のもの、これが全語で、体言その他も入る。半語とは『活用形がそれだけでは単独に意味を表すことができないもので、助詞や助動詞に連なるために用ひられるもので、他の単語が連つて始めて、その動詞の職能が全くされる』連続用法』のもので用言の未然形、仮定形(口語)の如きがそれに当る。(木枝増一氏『高等国文法要説品詞篇一四ページ』註2)

右の中では、往の半語の場合が充分説明されていないが、後の富士谷成章全集上では、

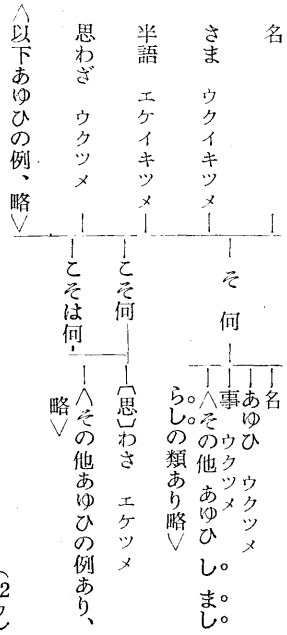
「ただし、『全語』半語』は活用形とは別種概念で、常に句末とか未然形とかのみを云うのではない。」

と述べておられ、前述の説を挙げられた後、「その外に、『見ゆ』を『見えもする』と言つた場合の『見え』思ひ果つ』を『思ひも果てぬ』と言つた場合の『思ひ』濡る』を『ぬれにぞぬれし』と言つた場合の『ぬれ』の類も半語である。それに対し、『見ゆ』『思ひ果てぬ』『濡れし』と言えば全語になる。」註。

と附言された。

半語の用例中相当数を占める往の例は半語という術語の成立上看過すべからざるものがあると思われる。半語の往は「何(あゆひ)何」の上の何であつて、それ以外の「何(あゆひ)」では全語と考えているようである。「半語をうくればにこり」「全語をうくればすむ」は「は」の類において、半語をうけるのは今いう未然・已然形で、全語をうけるのは名詞・用言の連用形、副詞などになる事が、刊本波家の説明との対照から考えられる。即ち、往は全語の中に含

まれることになる。註4 又目(已然形)にても同様に、「こそ」の結びにおいては全語であろうと思われる。今、「ぞ、こそうちあひの凶」の例でいえば、



上何で半語と「思わざ」を区別している以上結びの「思わざ」も半語とは別物であろう。

このように用法上終止する場合は、まず全語である。ところが、終止しないものでも全語があるのは、どのように考えるべきであろうか。

今、往相当の例で半語が、中に助詞をはさみ、用言が複用されている場合に用いられていることを更に進めて考察する。先述の「何も何かな」(一)の例で、「半語をわり入る」と云っているが表現がすつきりしない。その証歌を刊本によって見ると、「おほつかなくも。よふ。ことりかな」うしろめたくも。みゆる哉」  
 「ちよかにも。君がみかげのおもほゆるかな」人の心の。

えもするかな」の例がある。これらのうち、状を半語としたか確例がないから別とすれば、「みえもするかな」が残る。即ち、語を割って、「も」を入れたと解せられよう。(みゆる→みえもする)。「も」を上にも廻した里言も関係がありそうである。なお、助詞を半語とした場合は見えないので、「も」は半語の考察から切り離すべきである。註5

かくて「何も何かな」では「見え」の如きものが半語であることが考えられるとすれば、助詞「も」をさんで動詞の複合語となるべき場合を前提して、上何を半語とみなしたと考えられるのである。

この間の事情を考えしめるものに「継よそひ」がある。稿本にのみ見えるもので、三例中、一は刊本おほむね(四丁オ)の「継あゆひ」に相当する所に用いられている。

継よそひはかきりあるへくもあらねども、あたりく其詞のみしるして里言をあてつ引歌をはもとの抄にゆつりて此抄にはのせす(83オ)

他の二例はいずれも抹消されていて

(凡あゆひに装のきしかたをうくといふは継よそひの詞をへだておくなり、たとへはにもなどのあゆひ)△以下なし(86ウー87オ)

(すへであゆひに装のきしがたをうくるといふ皆継よそひの中をへだて、おく也、いつれとも同じければ其所々にはいはず(100ウ)「継あゆひ」が「ずしもあるかな」の如きあゆひの複合であるのに做えば、これも複合した装をさすと思われる。中にあゆひをはさんで

も、これら複合語を一つの継よそひと考えたことは、先述の「割り入る」という考え方と通ずるものである。この両例は、助動詞「つ」「ぬ」などをあげるまでもなく必ずしも正しくないこと、勿論である。

さて継よそひと似た術語に重詞かさねことばがある。成章独自の術語ではないが、稿本刊本ともに同趣の定義があり、刊本では装に關して、

かさね詞 重裝とはきくきく、たどるたどる、ありとある、くるひにくるひ(おほむね十四ウ)

と述べている。重詞は同一語の複合で、中にあゆひをはさむものも含めてゐる。この重詞の上何を半語とした例は「何にこそ何にあつた。しかし」(註)「なげやなげ」では重詞といひつつ半語に言及していない。又、「見る見る」は「見つゝ」(31ウ)と書いて、両者が同じ心であつて勢がちがうとしている。かかる諸条件を考えると、中にあゆひをおかないものは重裝をもつて(そのまま「継よそひ」となる)「語」とし、あゆひをはさむものは上何を半語と考えたのではなからうか。註

## 三

以上の考察を要約すれば、往の半語が文中の機能上一概念を表示すべきものを中途で切り取つたという場合に用いられてゐるのではないかという事である。更にアカ・エケ・オコの他の場合の半語も助詞を伴つてゐる場合において「つ」の概念を中断したという考えを応用できはすまいか。ただ「あゆひ」を伴つても半語から除外されてゐる往末塵ことばは名とひとしいという見地によるものであろう。勿論、その背後には詞としての獨立性が存していることは云つておかねば

ならないと思う。

まず末塵に相当する動詞終止・連体形は、稿本前半ではウク・ウクツメで示される。

これらは「事わざのウク」思おもひのウク」などとして半語とは別に扱われている。

(イ)ウク ワザナラバ名ト同(5オ、頭注)

(ロ)ウクツメ……アフゾウレシキのアフはアフ事で、故に名と等しい(20ウ)△要旨▽

また、往の場合も、

(1)名ノ事ニナル詞 体用ニ通スル字也 タトヘハ心イホリヤドリナト也 □シテヤドリテイホリテナトイヘハ用也(稿本裏見返)

(2)但、心して(心)なといふ時は此心といふ字思ひの詞となる事凡例体用の所にくはし(28ウ)

の例があり、心は名(体)、心しは用となる事、ヤドリ、ヤドリテと同様であると考へたらしいのである。かくの如く、ての場合体用を意識したことが考へられる。「は類」もこれに準じたものであつうか。かかる考察は往名なにつづくべきものである。この点竹岡氏のありな有名の説が注目される。註

前述の通り、半語の用例の大部分は装事の場合であり、他は状本が一例で他は不明確なもののみであった。稿本以外でも、竹岡氏の紹介された書入に註。

我わがてひめひめやま……後世のやは也

とある他は管見に入らない。

かくて半語全語が、稿本前半の時期において、あゆひとの接続を考察する上に装の分類の一方法として使用されたものであることが考えられる。稿本における装の分類法には事勢思という意味的な方法が併用され、

事 ワサト勢ト思ヲカネテ云也、タトヘハトルキルナトハワサ也、  
チルニホフナトハ勢也、コフルワフルナトハ思也(裏長紙見返)  
半語と併記されたりしている。<sup>註</sup>

成章の考察のあとを辿る時、伝統的な「詞」を意味中心にとりあげ文中の位置を考え、脚結との接続面を見つめながら、装の分類を求めていったのであろう。その過程においては意味的な分類、大ざっぱな方法が存したわけであろう。半語はその中ですこぶる不明確な内容であるが、一つの詞の中断した部分——それが文法的なある範疇として全語と対照して使用されたと思われる。

この意味内容の極限的に限定されて現われるのが本であろう。

状の半語として説いている唯一例、「はかな「あぢきな」は形態上、本と同じになつてゐる。「ハカナサ」「ツマラナサ」を表わす概念の「一形が「はかな「あぢきな」として現われているのであって、結果的には一活用形である。<sup>註10</sup> 半語が文中の機能を度外視して定位されたものでないのと同様に、同じ方法で限定されてあらわれたものが本であろうと思われる。

かように成章の考察法をたどつてゆくならば、伝統的な歌学の線に沿つて成章独特の学問体系を形成していく過程が、半語という未完成の術語の中に現われているといえよう。

#### 註

(1) 関係分だけを記した。例38なども同様である。

(2) 「国語学」21輯、稿本あゆひ抄と刊本あゆひ抄の成立九六頁。なお「国語」三ノ四あゆひ本抄考四九頁も同題の事が述べられてゐる。

(3) 富士谷成章全集上、四八二頁、注一一六。但、思ひ果ての類を全語であるといった例はない。

(4) は類はしがき「又云きかはきは 如此立たればなれば 如此伏皆濁也此分里言ニ異アリ立ハサイタラ <sup>サクテラ</sup>キイタラ伏ハ

□ニ因テ也又里同又 <sup>講テヨムサハ多クハ里</sup>名ヲツクレハ全里ト同ノハといふへし是ハ調ヲ受タル也(25オ)

右について、「ここで『詞』というのは、頭書にあるように全語をいうまたこの所で始めて『立』『伏』という術語を用いている」(富士谷成章全集上、四八四頁)と注されている。ここで詞||全語という考え方は注目すべきである。往を全語というのは、九大蔵本の書入れにあげているのが参考になるが、具体的にはむしろ状の往に限らるべきであると思われる。

(5) 「もがな」の間に半語を割り入ると考えられそうであるが、そうすると「みえもする」において、「する」が半語ということになるが、これは他の用例からして正しくない。

(6) 稿本「な何そ」(5オ)の頭注に、「何な何そ」の記事があり、上何について名、ウク、イキをあげ、

ウク サマ也 ワザナラハ名ト同

イキ 一ツノ詞ノ中ヲ分テイヘリ、イキハワザ也

といっている。このイキの例は「吹きな散らしそ」の類と思われる。一つの詞を分けたと云っているのは、本文に述べた所と通ずる。ただここではまだ半語はあらわれていない。

(7) あゆひ抄術語考、香川大学学芸部研究報告第一部第五号二二頁

(8) あゆひ本抄考、国語三ノ四、四七頁

(9) 「こそうちあひの図」(22ウ)(前述)その他。これらを見ると半語イキエケとあるのは動詞についてであり、状は別途にあげられている。

(10) 語文研究第三号「あゆひ抄の立居と本」において述べた。

受贈雑誌 昭和37年10〜38年4月 (その二)

能楽思潮	22	愛媛国文研究	12	中央大学国文	6
山口大学文学会志	23	岐阜大学研究報告	11	東京学芸大学研究報告	13
語文(日本大学)	14	文学語学	26・27	学大国文(大阪学芸大学)	6
国語の研究(早稲田高等学校)	1	文化	26卷3	北海道学芸大学紀要	13卷1
紀要(都立杉並高等学校)	3	文芸研究(明治大学)	10	国語教育	8
国文(お茶の水女子大学)	18	大谷学報	41卷3・4	日本文学研究(大東文化大学)	2
演劇学	4	京都府立大学学術報告・人文	14	田唄研究	3
近世文芸	8	上代文学	13	言語と文芸	13・16・19・25
香椎潟	8	上代文学研究会会報	12		
可里娑彌	2	山辺道	9	抜刷「大陽崇拜管見」	(糸満盛信)